

「県民と県議会との意見交換会」 大船渡会場 の概要

〔日 時〕 平成27年4月24日（金）13：54～15：56

〔場 所〕 大船渡地区合同庁舎4階 大会議室

〔テーマ〕 「若者・女性による新たなまちづくりについて」

〔参加者〕 （7名）

山 本 航（大船渡市漁業協同組合企画営漁指導課主事補）

竹 野 美貴子（タケノ文具）

中 野 圭（いわて連携復興センター）

米 澤 伸 吾（陸前高田商工会青年部副部長）

岡 本 翔 馬（NPO法人桜ライン311代表）

多 田 英 明（住田町商工会理事）

佐々木 敦 代（住田町企画財政課集落支援員） ※ 敬称略

〔出席議員〕 （8名）

樋下正信議員、岩崎友一議員、工藤大輔議員、岩渕誠議員、飯澤匡議員、田村誠議員、

久保孝喜議員、清水恭一議員

〔オブザーバー議員〕 佐々木茂光議員

〔事務局職員〕（5名）

◆ 参加者自己紹介及び現在の業務や活動状況の紹介

○山本さん

大船渡市漁業協同組合では、共同利用施設復旧事業等の補助事業を主に担当している。

○竹野さん

大船渡市内で文具店を家族で経営している。震災の1週間前に東京からUターンしてきた。震災がきっかけで市民活動に興味を持ち、大船渡市の被災松を扱った復興支援商品の開発を行う「ぼんずプロジェクト」を立ち上げた。2年前から12月に、青少年の健全育成と地域交流を目的として、「サンタが町にやってくる」というプロジェクトを実施した。青年会議所にも所属している。

○中野さん

旧三陸町出身で、中学校卒業後10年間ほど地元を離れたが、震災を機にUターンをしてきた。震災直後は仕事がなかったため、NPOという形で仕事をつくりながら、現在に至っている。

具体的な活動内容は、この地域ではもともと、NPOや住民活動などがそれほど活発ではなかったが、それができる環境づくりやきっかけづくりを行うもの。NPO活動について一緒に考えたり、活動のノウハウやスキルを持っている人のマッチングなどを行っている。

備考欄にNPO法人wiz代表理事とあるが、この団体は、人のネットワークを生かして地域を盛り上げたいという県内の若者の集まりで、設置してから1年が経過した。

○米澤さん

本日は、商工会から指名されて出席させていただいた。理容業を営んでおり、被災で父親が亡くなり、自宅兼店舗は被災して流出した。商工会青年部のほか、消防団に所属しており、震災で

は大変な思いもしたためその立場から、また、娘が先日小学校に入学したことから子育て世代の父親の立場としても、今日は話をさせていただければと思う。

○岡本さん

陸前高田市出身で、高校卒業後に地元を離れたが、震災を機にUターンし、これまでいくつかNPOを立ち上げてきた。現在、代表理事を務めているNPO法人桜ライン311については、津波到達地点に桜の木を植える活動をするというもので、津波の伝承を目的としている。

陸前高田市に戻ってからは、災害の伝承と減災の意識喚起、新しい地方都市をどのようにつくっていくか、それに対して若年層が社会参加できるようにするかの3つをテーマに活動している。

○多田さん

住田町で、プロパンガスの販売や上下水道工事業を営む傍ら、商工会理事、観光協会理事をしている。

住田町では、新しいものをつくるのではなく、現在ある資源を活用して地域おこしをしていこうと考えており、森林、気仙川、蔵、伝統行事などを活用することで、交流人口の拡大や地域活性化に取り組んでいる。

○佐々木さん

盛岡市出身で花巻市育ち、大学進学を機に東京に出て、そのまま東京に就職した。震災を機にUターンを考え、岩手復興支援隊の第1期生として、2012年10月から2014年9月まで住田町の観光協会働き、2014年10月からは住田町の集落支援員として働いている。

集落支援員としては、交流人口の拡大を図ることを目的に外部と連携したり、若者のネットワークを拡大して岩手の魅力をPRしたり、社団法人の立ち上げ支援等の業務を行っている。

◆ 意見交換

○岩崎議員

現在国では、地方創生として東京から地方に若者を戻す取り組みを進めている。

自分は大槌町出身であるが、高校は盛岡市に、大学は東京に進学し、父親との約束もあって地元に戻ってきた。しかし、同級生をみるとなかなか地元に戻ってくる人が少ない。若者が地元に戻ってこられる環境づくりが必要であると考え、産業の面で、どうすれば若者が地元で定住することができるか、あるいは地元に戻ってこられるか、考えをお聞かせ願いたい。

【回答：岡本さん】一度は進学等で地元を離れた人の多くは戻って来たいと思っているが、生活できる仕事が見当たらない。皆故郷は好きなので、生活できるだけの仕事や住宅環境を整えば、ある程度は戻ってくるのではないかと。

地方では、特にクリエイティブのある仕事が少ない。地方では若い人が少ないために発言権がなく職場でも軽く見られるが、若い人はスピードや行動力がある。このため、若い人に任せられる土壌があれば、うまくいくのではないかと。第一次産業等には若い人がおり、面白い取組をしている人も多いが、第一次産業が軽く見られがちだったり、若いこと自体でだめに見られたりするため、そのような活動が波及していかない。

自分は若い人たちのネットワークに支えられて活動しているが、さまざまな取組をしている他地域人とつながることで、アイデアが広がったり、新しいものが生まれるのではないかと。

【回答：中野さん】難しい課題であると考え。自分は震災を機にUターンをしてきたが、周囲

でUターンをしてきた人をみると、自分も含めてもともと定職に就いておらず、独身の人が多い。定職があり、家族もある人はほとんど戻ってきていない。

地元には仕事がないのであれば、自分で仕事をつくりだすなど、さまざまな働き方があることを知ってもらうことが必要ではないか。

○岩崎議員

地元に戻ってくると給料が安くなるため帰りたくないという人もいると思われるが、東京と地元の賃金の格差をどのように考えるか。

〔回答：岡本さん〕生活にどれだけお金が必要かで変わってくる。自分の場合は東京での収入の方が多かったが、こちらは生活費も安いので生活水準はあまり変わらない。両者の差は、東京では頑張った分だけ成果に反映されるとの実感があったが、こちらではそうでもないこと。

○工藤議員

中野さんの活動は、人のネットワークを生かして仕事をつくるということであるが、どのようなニーズがあって、どのような活動をされているのか教えていただきたい。

また、活動の立ち上げの時期には行政の支援はあるが、その支援が止まった時、大きな転換期を迎えると思う。この際の御苦労とか、行政の支援のあり方についての何か希望はないか。

〔回答：中野さん〕何か活動をしたいと考えたとき、一人ではなかなか活動を立ち上げることは難しいが、考えに同調する人がいればできることもあるため、若い人を集めたイベントを実施するなど、若い人が集まる場の提供や、つながりをつくるきっかけづくりをしている。

こうして何かしようとなった場合には、ノウハウ習得のため勉強会を開催するほか、立ち上げに必要な資金をクラウドファンディングで集めるといった流れをつくっている。また、地元の若い人にそのような事例を知ってもらうため、地域で起業した人たちにインターンシップとして岩手県出身の若者を送り込み、現状や可能性を体感してもらっている。

立ち上げ後の組織の持続性については、自分達の組織でも課題と思っている。現在は復興に対して多くのお金がついているが、今後寄附等を集めていくためには、自らの活動をわかりやすく魅力的にPRすることが求められる。

また、今後行政が縮小し公共サービスが減少することが見込まれるなかで、自助や共助、NPO活動などによって、自分たちで自分たちの課題を解決していくという流れをつくる必要がある。そのためには行政がNPOをパートナーとして意識していく必要がある。

○久保議員

本日は4名の方がUターンされたということだった。その4名の方にお伺いするが、行政はさまざまな情報を発信しているが、Uターンする際に、こうしたものに接する機会はあったのか。また、行政の情報にアクセスすることで、Uターンの判断基準になったのか、そうした経緯を伺いたい。

また、この地で暮らしている方々にお伺いするが、若者に対する地元行政のメッセージを感じ取る機会が今まであったかどうか、それぞれ教えていただきたい。

〔回答：佐々木さん〕東京では人材紹介の業務に携わり、学生や転職希望者に対して職を斡旋する営業を行っていた。職探しは基本的にネットを使うが、行政だけでなく民間企業も含めて岩手県の情報是非常に少なく、自分は行政の情報は活用しなかった。

復興応援隊のことを知ったのは、ネットで探してようやく見つけたという状況。岩手県で

働き手を探しているとは周知されておらず、その意味でPRは弱いと感じる。

〔回答：岡本さん〕 2011年5月にUターンしたが、行政のサポート等は知らず、利用していない。

〔回答：中野さん〕 行政の情報は利用しておらず、行政が情報発信していることも知らなかった。

〔回答：竹野さん〕 震災前にUターンしてきた。その頃は、大船渡市からの情報発信は知らず、単純に家族が地元にいることから帰ってきた。震災後は、都会でも地元の認知度が上がっていることから、その意味では情報発信ができているものと思われる。

〔回答：米澤さん〕 自分も高校卒業後に9年ほど東京に住んでいたが、実家が商売をしているため、地元に戻ってくることを前提としていた。地元に戻ってすぐに商工会、消防団に入ったため、発信された情報を受けるといふより、情報量が豊富な組織に自分から入ったため、情報量についてはあまり気にならない。

〔回答：山本さん〕 自分も若者向けの行政情報はあまり見たことがない。

○久保議員

NPOは、組織の持続可能性をどのように確保するかが課題であり、組織の持続可能性が活動の持続可能性にもつながる。実際に活動されている皆さんは、どのように考えるか。

〔回答：多田さん〕 地域活動を展開する際、行政、地域住民、NPO等の団体の3つの組織がある。これらがそれぞれ単独で活動しては全くうまくいかないが、それらがまとまれば素晴らしいものができる。

地域活動の担い手を考えると、行政は給料をもらっており、また、我々地域住民は商売等をしていることから食べていくことができるが、NPO等の団体は食べていけるのかと心配になってしまう。アメリカ等では、大富豪がいて、そこからお金が出ているらしいが、日本ではそのような構図になっていない。

全てのNPOは無理であろうが、岩手型モデルとして、一定水準のNPOが食べていける仕組みづくりが必要である。そうしないと、優秀なNPOや人材が他に流出してしまう。

〔回答：中野さん〕 もともと、この地域はNPO一本で食べていける土地ではない。東京は市場が大きいので食べていける人は何人もいるが、岩手県では数えるくらいしかいない。現在は、復興で一時的にニーズはあるが、今後はNPO一本では難しいと思う。

自分のやりたいことは一つあるが、それには複数のアプローチの仕方がある。一つの団体だけでは一定水準の収入を得ることは難しいため、アプローチごとにさまざまな団体で少しずつの収入を得るといふ働き方をしている。

〔回答：岡本さん〕 現在自分は幸運なことになんとかやっていける状況にあるが、やっていけないNPOは多い。これまで岩手県はNPO不毛の地であり、起業もしにくく、NPO活動で食べていける人はわずかであった。現在は震災関連でさまざまなお金がついているが、今後は新たな展開をしていかないとやっていくことは難しいであろう。

やはり、お金を外から持ってくる感覚をNPOも持つ必要がある。岩手県のNPOに一番足りないところがマーケティングの感覚だと思う。良い活動をすればお金がつくのは当然と

思っている節がある。東京のNPOや海外のNGOは、マーケティングがしっかりしている。外部から見て、活動内容とメリット等がイメージしやすく共感を持ちやすい。

今後はマーケティングをできる団体が残っていくだろうし、行政はそのような団体が少しでも増えるようにサポートしていただければありがたい。

○久保議員

佐々木さんは、集落支援員として行政と民間との間に立つことが多いと思われるが、その観点から、行政に足りないところはどこであると感じているか。

〔回答：佐々木さん〕 行政からすると、さまざまなことをやってあげているし、お金も付けている。その一方、住民は行政を批判するが、住民だけでは何もできず行政に頼ってしまう。

私は集落支援員として行政の立場で住民の意見を聞いているが、地方では行政に入るのはエリートコースであるため、本人にそのような意識がなくても、どうしてもそのような感覚になり、自分から住民の声を聞きに行ったり、足を運ぶということが少ない気がする。

○岩淵議員

若者、女性の声は大切であるとは誰しもが言うことであり、震災後にも強調されているが、地域との関わりあいの中で、どの程度その声が反映されているのか。

地域に戻ると若者や女性の声が消えてしまっている印象があるが、それをうまくやっている地域がうまく回っていると思う。特に住田町などは、過去に地域の若者が、無限会社天地人をつくって活動してきた素晴らしい文化がある。

若者の活動に対して地域の理解がどの程度あるのか、地域との関わりあいをどのように捉えているか教えていただきたい。

また、東京であれば、地域と関わりを持たなくてもNPO活動は可能であるが、ここでは活動を地域に理解されないとやりにくいのではないか。

〔回答：多田さん〕 無限会社天地人が主催した「すたーおっちゃんぐ種山ヶ原」は10年間続いた。非常に素晴らしい活動であったが、次の世代へのバトンタッチがうまく行かなかったことが課題であったと聞いている。

現在、うまくいっているのが、種山ヶ原に5千人集めたケセンロックフェスティバルである。これが成功したのは、3市町の若者たちが市町の垣根を越えて連携できたからだと思う。

〔回答：中野さん〕 自分も若者であるが、地域の若者の中では浮いているような感じがある。NPO活動をしようと声をかけても面倒くさい、よくわからないなどと言われる。NPOで活動していることを隠しているわけではないが、地元では普通の人として暮らしている。大船渡市全体、あるいはそれよりも広いエリアになって初めてNPO代表理事として活動している。エリアによって、人によって立ち位置を変えている。

〔回答：岡本さん〕 NPOの活動がどの程度地域と関連しているかによると思われる。地元との関連性が高い活動内容であれば地元の理解は当然必要であるが、そうでなければあまり必要はないのではないか。

自分も最初は地元で話を聞いてもらえないことが多かったが、地元的话题をふることで信用を得て話を聞いてもらった。そうしたメリットは地元民の強さである一方、そうしたしがらみがないことも強さになる。活動をどのように地域に根付かせたいかにより異なる。

震災後にできたNPOは今一時的に盛り上がっているだけであり、今後は現在盛り上がっていない人をどのように取り込んでいけるかが課題である。その中には地域の方々も含まれるが、それは同世代だけでなく、自分たちの上の世代も下の世代も含まれる。

【回答：竹野さん】大船渡市内では世代間交流が少ないと感じている。何をやっても中高年が多く、若い人が出てくる場が少ない。世代間交流も郷土芸能などでも、どこへ行っても若い人と高齢者しかおらず、その間の中間層がない。次の世代に、次の世代にという世代間のバトンタッチがうまくいっていないのではないかと感じる。

【回答：佐々木さん】地元で若い人はいるにもかかわらず、協議会や総会では出席するメンバーがいつも一緒である。なぜ若い人はそのような活動に参加しないのかを考えると、高齢者がバトンを次の世代に渡したいとは言っているが、実際にはしていないのではないかと感じる。また、若い人も自分に自信がないため、積極的ではないからではないかと感じる。

住田町は震災後に入ってきた方々が結構残っており、それらの人たちや地域と行政が連携していることから、自分たちの意見は聞いてもらえていると感じる。しかし、住田町の地元の若者の声は、なかなか出ず、また、聞きに行くことができていないのではないかと感じる。

【回答：米澤さん】自分から参加した消防団、商工会青年部では、周囲は自分の親の世代ではあるものの自分の話を聞いてもらえている。その場では対等である。自ら積極的に入って行けば話を聞いてもらえるのではないかと感じる。自分から行動しないと発言力は持てないのではないかと感じる。

【回答：山本さん】消防団に入っているが、人が少なく辞めさせたくないからか、皆さん自分の話を聞いてくれるし、やさしく非常に居心地が良い。

職場では担い手育成基金で漁師の弟子をとるという事業を担当しているが、弟子入りして根付いた若い人もいます。漁協の定置船も10代や20代の若い人が増えてはいます。

○岩淵議員

現在、人口減少や担い手不足の中で、地域や職場では若い人や女性が求められており、その意味でチャンスである。地域に受入れる文化があるかどうかは課題であろう。普段の活動の中で若い人がやる気を削がれていないかと心配であったが、皆さんのお話を伺って安心したところである。

○田村議員

震災前は、NPO法人と言われても今一つピンとこなかったが、震災後はさまざまな活動を目の当たりにしたことで理解が深まり、その活動に非常に感謝をしているところである。

高齢者にとって、NPO法人と言われてもよくわからない点が多いことから、自らの活動内容をわかりやすくPRする必要があるのではないかと感じる。

被災前は、北里大学の学生と漁協がタイアップして水産業振興の取り組みを実施していたが、ワカメの消費拡大等をNPOとして活動することはできないかと感じる。

【回答：中野さん】自分も、両親に対して自分が活動するNPOについて100回くらい説明したが、いまだに理解してもらえない。活動を理解していただくということは、今後の大きな課題であると考えている。

水産業振興については、いくつかのNPOが販売支援等を実施していたと記憶している。地域の課題解決がNPOの目的である。行政や企業とも目的は一致するはずであることから、

それらの融合が進むことで、NPOの活動は広がっていくものと思われる。

【回答：岡本さん】 株式会社は売上で評価することができるが、NPOの活動は指標化が難しく、評価がしにくいいため、活動内容を説明しにくいという背景がある。

若者や女性に対して期待をかけることは良いことであり大切なことと思うが、現在足りないことを全て若者や女性に求めるのは間違っていると思う。街は単純なものではなく、全ての世代が自分たちの得意とするところを持ち寄らないと街の課題は解決できない。

また、社会の課題を全てNPOがなんとかしてくれると思われている風潮もあるが、そうではないことを住民の方々にも理解してもらいたい。10年、15年という長いスパンでNPOの在り方を組み立てていく必要がある。

○清水議員

多田さんがおっしゃっていた、新しいものをつくるのではなく、地域にあるものを情報発信することで交流人口を増やしていくという発想は非常に大切なことであると思う。そこで皆さんに伺いたいのが、皆さんが地域で活動している中で、地元にも思いもよらない価値があったとか、逆に期待したほどではなかったなどの事例があれば教えていただきたい。

【回答：佐々木さん】 地元の人が当たり前と感じていることが、外から来た人にとって貴重であることがいくつかある。例えば、田植えの体験や山菜採りなど、自分で食べるものを自分で育てたり採ってくるということは、東京の人たちにとって貴重な体験であると思われる。

【回答：多田さん】 佐々木さんをワサビ採りに連れて行ったところとても喜ばれた。地元では普通のことが、外から来た人にとっては価値があるということを教えられた。

【回答：岡本さん】 陸前高田の長所は、外の人や若い人と触れ合うことに対して抵抗がないことと感じている。震災前、地元の高齢者は、外の人があるとよそ者として抵抗があったと思うが、震災後はさまざまなボランティア等と付き合いってきたことで抵抗がなくなってきた。

東京から来た人に陸前高田の一番いいところは何かと聞くと、「人」との答えが圧倒的に多い。東京では家庭や職場以外で自分と違う世代に付き合う機会がほとんどないため、陸前高田に来て、いろいろな世代と触れ合うことができ、受け入れてくれるということはいいことと思う。これが震災直後の一過性のものに終わらないようにしなければならない。

【回答：米澤さん】 商工会青年部では、震災前から地域交流や地域振興の観点から子供たちのスポーツ大会を開催していた。震災直前にも、野外活動センター近くの体育館で東北各地から子供たちを呼んでサッカー大会を開催するなど活動を継続していたが、昨年秋田県でイベントに行ったとき、そのスポーツ大会で陸前高田市に行ったことがあるとの人から声をかけていただき、話が弾んだことがある。自分たちが実施した活動で陸前高田市のことを知ってもらうことができたことを実感した機会であった。

【回答：中野さん】 地方の良い点、悪い点は表裏一体な部分があると思われる。例えば、地方ではおすそわけ文化が残っているため、何かしらものをもらうことが多く餓死をする心配がない。その一方で、都会で孤立しても生きていくことができるが、地方では孤立すると生きていくことができない。また、おすそわけでもらったものは、東京から見ればそれなりの価格で売れるものもあるが、おすそわけでやり取りしているため、なかなかその価値に

気づくことができない。その価値に気づくためには、外の視点を入れていくしかないのではないか。

【回答：竹野さん】 良くも悪くも仲間意識を感じる。知っているところに対してはやさしい。また、恥ずかしがり屋の地域性であるため、会合やイベントに一人ひとりに頼むと参加してくれるが、自分からは参加しない。その一方で、参加して動き出すとエネルギーがある。

【回答：山本さん】 水産関係に携わっているため、年間を通じて漁業資源が豊富であると思う。地元では価値がない、売れないと思うものも、他では価値があるもの、売れるものが多い。それらをうまく活用できれば、地域がもっと活性化するのではないか。

○清水議員

岩手県、特に県北沿岸の人はPRが下手といわれる。皆さんは地域の資源に向き合いながら活動されていると思うが、皆さんのネットワークをさらに拡大し、一層御健闘いただきたい。

○飯澤議員

私は企業人として育ってきたため、本日、皆さんのNPO活動の多様性に驚いた。

地方は以前から人口減少の傾向にあったが、震災が追い打ちをかけてその傾向に拍車をかけており、これまで行政がフルセットでサービスしてきたものをこれからは分業していく形になりつつある。また、社会が刹那的で成果主義に走っている中で、隙間を埋めるNPOの価値が上がってきていると感じた。

若者・女性による新たなまちづくりということではなく、世代に応じて活躍できる場をつくっていくということだと思う。これに、行政は本質的には入っていくことが難しいが、皆さんの活動しているところに、逆に行政を引っ張っていくという形にしていけばいい。先ほど問題提起があったように持続性と、新たな仕掛けをつくっていくことは大変な困難を伴うことだと思う。最終的には人口を増やしていくことを、行政も地元の方々も一緒にしていかなければならない。

NPO活動が浸透し、社会に普通に存在するようになるまでには、まだまだ一層の理解と努力が必要と思うが頑張してほしい。若い人たちの居場所がない社会をつくった自分たちの責任も痛感しているところであり、皆さんの活動で若い人たちを触発させ、よりよい活動をしてもらいたい。

○樋下座長

最後に、御参加いただいた皆様から、本日の意見交換の御感想をいただきたい。

【山本さん】 会場に来るまで何を話してよいかわからなかった。話した内容が皆さんの参考になればと思う。

【竹野さん】 このような機会を与えていただいて感謝している。このような場に呼ばれる人は毎回同じ人になりがちなので、人を入れ替えるなどして、さまざまな人たちの意見を聞いてもらいたい。

【中野さん】 みんなそれぞれの役割をもって活動していると思うが、目指すところは一緒であることから、いろいろな人がいろいろな形でかかわることができるようにしていきたい。

【米澤さん】 これからも頑張っていくので、沿岸被災地への御支援よろしくお願ひしたい。

〔岡本さん〕このような企画は1回だけでは効果が低いので、あとに続けてもらいたい。

〔多田さん〕これまでも気仙は一つと言いつけて個別に活動してきたが、今回の場をきっかけに連携しあい、何かできればと思う。

〔佐々木さん〕今回のメンバーだけでの声を聞いて終わりではなく、ここに出てこないような、さまざまな方の意見を聞くことで、気仙の声と捉えていただければと思う。

◆ 閉会

○樋下座長

私は20年前に青年会議所に所属していた。そこでは、無限の可能性に向かってチャレンジしようとのスローガンで活動してきたが、本日さまざまなお話を伺い、皆さんもまたさまざまなチャレンジをしながら活動していることに心から敬意を表したいと思う。

本日いただいた御意見、御提言については、県議会の全議員が情報共有し、今後の議会活動に生かしていくことから、これからも県議会に対する御意見や御提言があれば、地元の県議会議員あるいは県議会事務局までお寄せいただきたい。

本日は、お忙しいところ、御参加いただき誠に感謝申し上げます。